



**近未来家族旅行  
(上卷)  
南海部 覚悟**



——家族三人で、ヨーロッパ旅行に行くことになった。一大事である！

妻の発案で最終目的地はイタリアローマの、世界遺産コロッセオ。

さては、三か月前から町の共同作業場で、家族に内緒で制作していたエアーワゴンの存在がばれたか……。

案の定、夕方になって長男からエアーワゴンのスペックデータを要求するメールが届いた。

ワゴンのオペレーションプログラムと、フライトプランを作るという。

ソフト開発は息子に一日の長がある、企画から一年余り、ひたすら内密にしていたのだが、家族は全てお見通しだ。



ひと昔前なら、飛行機とホテルの予約を含むツアーの契約を、旅行会社に依頼する段取りだが、貨幣経済が崩壊した今では、航空会社もホテルも旅行代理店も存在しない、何れもサービス集約の最たる業界で、通貨の信用が薄らぎ、サービス報酬決済の手段が無くなって、15年前に消え去った。

だから、旅行の全ては自前で企画・準備する。

日本からヨーロッパに向かうには、シベリア上空を大円コースで北西に飛ぶのが一番単純だが、ワゴンで一気に直行するわけにはいかない。

朝鮮半島から黄河流域上空を經由し、シルクロードに沿って西に飛行する。

安心して着陸できる集落が点在し、万が一のサバイバルにも対応しやすい、観光を目的とした家族旅行の趣旨にも合致するのだ。

ここで、エアーワゴンの話をする。

その前に、虚時間物質について説明しなければならない。

虚時間とは、虚数（二乗してマイナスになる数）の軸を持つ時間のことである。

我々人間は、実時間に生きているから、虚時間を認識することは永遠に出来ない。

然るに、物質を構成する素粒子は、実時間にも虚時間方向にもボンヤリと拡がって存在する。（物理学では、時間は流れるものではなく、物やエネルギーが時間の軸に沿って拡がっていると考ええる。）

ところで、速度の単位は（ $m/s$ ）であり、加速度の単位は（ $m/s^2$ ）である、仮に  $s$  が虚時間なら、加速度の値がマイナスになる。

つまり、虚時間に拡がる素粒子は、重力や電磁力の場でマイナスの加速度を受ける。

素粒子の、実時間と虚時間の拡がり方の割合は、時間と空間の係数が光速であるのと同様に、どの系に対しても絶対的に一定で、地上ではその合成加速度が  $G$ （ $9.8m/s^2$ ）であると考えられて

きた。

それが、ある発見によって根底から覆った。

大分県のある鍾乳洞の石が、下から上に落ちることが確認された。

天井石の発見である！

素粒子の実時間・虚時間への拡がり方が、決して一定では無いことがこれにより明瞭になった。

だったら、虚時間物質を抽出精製できるはずだ！

安定核核分裂のプラズマ分離抽出法によって、虚時間物質を大量生産出来るようになるのは、それから数年後だった。

虚時間物質は、地球の重力場でマイナスの加速度を受ける――。

当然利用しない手はない。

大量生産が可能になって以降、堰を切ったように虚時間物質の素材が市場に溢れた。

輸送技術への利用がまず先行した、墜落しない航空機――夢の実現だった。

当初は、虚時間砂鉄の浮力と、通常砂鉄のバラストを利用したバルーンが主流だった。



ただし、これには構造原理的な問題があった。

熱気球や軽気球同様の浮力コントロールの難しさもさることながら、慣性質量の大きさからくる機動性の欠如は、どうしようもなかった。

プロペラやターボファンで押せども引けども一向に動かない、一旦動き始めると、今度は少々のことではブレーキがかからない。

墜落しない理想に反して、建物に激突して命を失う者、上昇したまま帰ってこない不運な猛者も多数存在した。

それらの反省から、人々は無重量のパーツ（部品）を利用し始めた。

虚時間素材と通常素材を同量混合して、重量ゼロのパーツを造る、こ

れこそ**3D**プリンターの手柄である。

素材を液体又は粉体にして混合する生産手段では、地球重力下で絶対に混ざらない、虚時間素材と通常素材とを交互に積層する製造法により、初めて実現した技術だ。

それらの部品を製造し、精密に組み上げたものがエアーワゴンに他ならない。

さて、我が家のエアーワゴンであるが、アルミ合金とポリカーボネート有機硝子で構成された、3m×4m×8mの大きな箱である。

安定核原子炉を含む動力部分は、屋根の約1mの厚さに集約され、その直下に一对のダクトドファンが折り畳まれている。

必要な揚力と推力の大半をこのファンが受け持つが、細かな姿勢制御は圧搾空気のジェットノズルで行う。

キャビンの中央にベッドが4基、2段にセットされたそれらを両側の壁に折り畳むと、2m角の作業スペースが生まれる。

床のハッチを開けると、天井のウィンチで地上から物を吊上げることが出来る。

作業スペースの前後には、ベッドを挟んだはす向かいに2か所のエントランスハッチがあり、それぞれの正面にはシャワーユニットと、トイレサニタリーユニットが配置される。

残る前後の空間は、大きな硝子窓に囲まれた畳敷きの展望室と、コンパクトにデザインされたギャレイ、つまりキッチンだ。

これで全旅程5週間余りを3人と1匹（猫）が生活する、なんともミニマム！

古い人間としては、やっぱりこういうものにはコクピット（操縦席）が欲しい。

バブルキャノピイに操縦桿、スロットルレバー……。

ささやかな夢は、にべもなく却下され妻のパウダーコーナーとなった。

ワゴンのオペレーションシステムは、殆どの飛行行程を自立航法で誘導する、操縦が必要なときは、長男がモニターを見ながら自分のゲームコントローラーで行う、スナック食べながらでも出来るんだそうだ。

重量ゼロのパーツで組み上げられた機体だから、総重量もゼロである。

食料や水、携行品と人の体重が積載荷重となって、屋根の下のダクトファンがその分を負担する、安定核原子炉は十分な余力で、この機体を時速500Km以上で推進させる。

携行品に携帯3Dプリンターと、マテリアル（素材）セットは欠かせない、もし途中で機体のメカが故障した場合、その場で交換パーツを製造する。

微妙な総重量の調整に、少量の虚時間の水——つまり、天井水を積んでいる。

いくら喉が渴こうとも決して飲んではいけない、嚥下できないから息が詰まる、なんとか胃に納めても、次の朝自分の尿で顔を濡らすことになる。

西に傾いた秋の陽が、下町の川の穏やかな流れを煌めかせ、まるで川面が活着ているようだ。

紅く染まったその先にいったい何があるのだろう・・・明日、それを確かめに西に出発する。

黄色い大地に、一筋の長城が、人々の拘わりを隔てるようにどこまでも伸びる。

黄河の北は地平線まで植生が薄い。

とはいえ世界遺産である。着陸して近くで一泊したいところではあるが、中国東北部は、一昨年弟のエアークラフトと一緒に廻った経緯もあり、妻も長男も興味なさそうなので、先を急ぐ。

最初の目的地は敦煌、シルクロードの要衝、砂漠の宝窟（莫高窟）なのだ。

猫のビワが窓越しに何か見つけて、頻りにニャーニャー鳴き始めたので、それではと長城に沿って高度を下げる、石の回廊を歩く何人かが手を振ってくれた。

エアークラフトの良いところは、対象物に上空からダイレクトに近づけることである。

かつて大流行したドローンの機動性よろしく、地上からは絶対近づけない極限であっても、観光気分を身で寄せることができる。

狼煙台の一つに人々が集まり、テントを拡げて何かを焼いている、床の換気孔を通して香ばしい匂いがキャビンを満たした。

灌木が点在する急峻な黄色い山脈が、急に開けてユツタリと大河が現れた。

濃密な泥流が、暗い褐色の筋となって地平線まで続く。

十数年前なら、ロシアか中国がすぐにスクランブルを掛けてきそうな空域だが、今はそんな心配もない。

貨幣経済の崩壊は、国家から軍事力を奪い去った、国を守る気力も、必然性をも奪ってしまった。

国家と戦争は表裏一体である、国によって戦争が勃発し、戦争の為に国家が組織される。

国家が先か戦争が先か、今となっては判定もつかないが、国家の存在なしに戦争はない、戦争の存在なしに国家もない。

今は、人々が国家の支援を必要としない時代である、国民ひとり々の国家への帰属意識が希薄だから、戦争の可能性も限りなく低いのだ。

15年前、ロシアのカムチャツカ近海で、超巨大地震が発生した。

その折、東シベリアの一部が陥没し海水が流れ込んで、カムチャツカ半島のほぼ全域がロシア本土から切り離された。

与党の一部に、そのカムチャツカ島と北海道以南の日本列島とを、等価交換しようと運動している勢力が存在する。

ある議員の主張によると「この交換によって我々は富士山を失うことになる、然るにカムチャツカには富士山より遥かに高いクリュチェフ山が存在する、温暖化によって全域が亜熱帯となった日本列島を捨て、この新世界で愛おしい日本文化をもう一度育もう……。」

カムチャツカで日本文化が花開くとは誰も思わないだろうが、冬の富士山に雪が無くなったのも事実である。

今や日本人は、日本人であり続ける理由は何一つないのである。



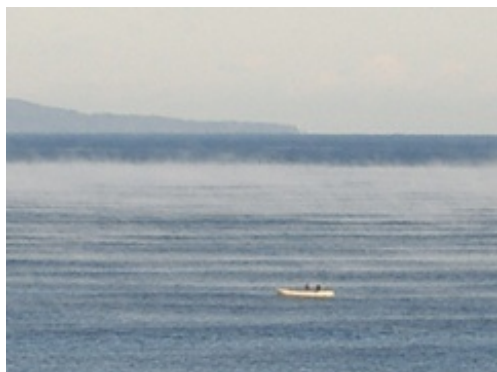
「バイカル湖、見てみたい！」  
前方のギャレイから妻の甲高い声がした。  
「砂漠の穴蔵なんて嫌よ、綺麗な湖がいい、バイカル湖が  
良い！」  
いつもの気まぐれだ。  
気の毒だが、今回だけは希望に添えぬ、湖見たいならカスピ  
海で我慢してくれ、敦煌（莫高窟）は俺の夢だ！

今回だけはダメなんだ！

バイカル湖の水面は深い群青色に沈んでいた。

世界最深の湖である、莫高窟への未練も、この暗い湖面に沈めて割り切った。

湖面の所々に、灰色の靄がかかって全く視界がきかない、言い出しっぺの妻も、今は意気消沈の様子だ。



また、猫のビワがニャーニャー鳴き始めた。

ビワの視線を辿ると、遠方の湖面に何やら浮かんでいる。モニターで拾ってピンチアウト（拡大）・・・どうやら小さなボートのようだ、マストが折れている。

更に拡大すると何かがモソモソ動いている。

「犬だよ父さん、小さな子犬だ！」

長男が興奮して大声を上げる。

人影は無い、どうやら犬の飼い主は乗ってないようだ。

そういえば、昨夜この辺りの天気は嵐の予報だった、子犬だけ乗せてボートが流されたか・・・。

「ちょっと行って助けてくる、ホバリングモードで近づけてくれ！」

「ホバリングモード？」

天井のウインチにゴンドラをセットする、床のハッチがスライドして見下ろすとボートの真上に来ていた。

「いいぞ！ゆっくり下げて・・・。」

ゴンドラを降りるとき、一瞬嫌な気がした。

ボートに立って子犬に手を伸ばすと、怯えることもなく腕に飛び込んできた、よほど心細かったんだろう。

その瞬間、手を離れたゴンドラが一気に上昇していった。

灰色の靄にエアーフゴンは直ぐに見えなくなる、案の定ホバリングモードにセットされていなかった、亭主の体重がボートに移った途端、揚力が勝って急上昇する、ホバリングモードはそれを防ぐプログラムなのだが・・・。

まあ、長男のことだ、GPSでモニターして直ぐに迎えに来るだろう。

暗い水面に波はない、鏡のように鎮まりかえっている。

生命の気配が無くて、逆に不気味だ。

低い靄の向こう側に、少し色の違う靄が盛り上がり始めた、みるみる高くなって近づいてくる。

目を凝らしてよく見ると、紅みがかかった大量の点が大きな渦を巻いている、やがて不快な羽音で、その正体が明瞭になった。

蚊である！巨大な蚊柱である！

夏の終わりに、河岸で立ち昇る日本の蚊柱なんかとはわけが違う。



さながら、紅いトルネードのような凶暴さで、我々のボートに襲いかかって来る。  
子犬を抱え上げ、足元にあったボートの帆布（セイル）を被って蹲った。  
帆布を叩く羽音が強くなる、数匹中に入ってきた、子犬の悲痛な鳴き声が羽音に被さる・・・

その時だった！

甲高い金属音とともに、強烈な風が帆布をはためかした。顔を上げるとエアーワゴンの二つのダクトファンが、蚊柱を吹き飛ばしていた。

「ホバリングモードの起動アイコンを設定し忘れていたんだ・・・ごめん。」

キャビンに入ってきた数匹の蚊を、殺虫スプレーで追いながら、長男が謝った。

「こっちに向けないでよ、それ！」妻も苛立っている。

「ところで、この犬どうする？岸辺に置いていく訳にもいかんだろ。」

「——連れて行けば、あなたに懐いているんだから。名前はバイカルでいいんじゃない。」

そのバイカルは、エアーワゴンに上がるなりビワと睨み合って動かない、琵琶湖とバイカル湖じゃ勝負にならんだろうと見ている、じっと身構えたまま動こうとしない。

試しに、二匹の真ん中にミルクの皿を置いてみた。

ゆっくりと鼻を近づけたバイカルに向けて、ビワの猫パンチが炸裂した。

亭主の腕に逃げ込むバイカル・・・情けないほど気が弱い、子犬に親近感がわいてきた。

バイカル湖からヨーロッパへの行程は、地球の大円に沿って北西に進むしかない。

家族の想いは一致していた、“早くヨーロッパに入りたい”

北シベリアからノバヤゼムリアを掠め、コラ半島上空を越えて、スカンジナビア半島の西海岸へ出た。

ノルウェー北部のロフォーテン諸島には、有名なメイルストローム（渦潮）を発生させる海域がある。

床のハッチを開けて見下ろす海面に、いくつかの小さな渦が集まると、廻りの海全体が回転し始める。恐ろしい深淵が中心に生まれ、圧縮された空気の破裂音とともに、大気の振動がキャビンの中にも伝わってきた。

鳴門の渦潮とは、似て非なるものだ。家族全員（新入りのバイカルも含めて）大いに感動し、エアークラフは久しぶりに沸き立った。

半島南部の、深い入り江の奥で一夜を明かすフィヨルドキャンプ！

断崖の下の三日月状の小さな砂浜は、今や我が家のプライベートビーチ！

長男と二匹の相棒は、着陸するなり海と戯れている。

この時期にこの緯度で、海に入ることが出来るのは、やはり温暖化の為か。

「フィヨルドは、急に深くなるから沖に出るなよ！」

大声を出す亭主は、エアークラフの繫留に忙しい。

なにせ重量ゼロの大きな箱だ、僅かな風でも上昇しかねない、大きな岩を見つけてロープを掛けていく。

圧搾空気で4か所地面にアンカーを打ち込んではいるのだが、砂地はアンカーが効きにくい。

妻が左舷のハッチを大きく開け放った、こちらは右舷ハッチの倍の大きさだ、ギャレイの半分を開放できる、ハッチの上にタープを取り付け、手前に大きく引き出すと、バーベキューパーティの始まりだ！

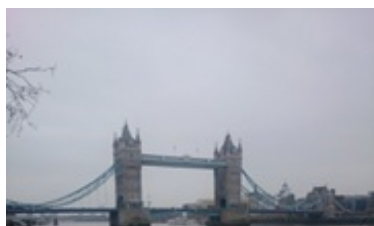
「ここのハッチ、何でもっと大きくしなかったの？料理運べないじゃない！」

何とでもほざいて下さい女房殿、車のリアゲートとは違うんだ、与圧が掛かるんだ上空で、それでも苦労したんだ設計に……。

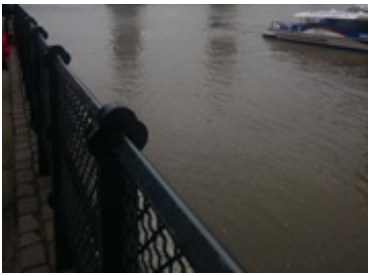
山々に囲まれた入り江の出口の水平線に、丁度大きな夕陽が懸かって、優しく強く頼もしかった。

明日は、ここから北海を越えてイギリスへ向かう。

幕末の歴史は好きな分野だが、維新以降日本に近代的な技術と、貨幣経済を指導した国は、イギリスとアメリカである。



ドイツがそれに続く訳だが、これらの国々には共通した国民性がある。  
市場供給物・市場サービスに対する信頼・期待感、プロフェッショナルへのリスペクトである。



他の多くの国々ではこう考える。

“本来、自分たちで製造準備すべきものを、金を払って他人に頼むわけだから、いいものである筈がない、いいものなら自分たちで使って人には渡さないだろう。”

然るにこれらの国ではこう考える。

“お金を払って物やサービスを購入するのだから、当然自分たちが考えるよりも、遥かに高品質でいいものに違いない、またそうあるべきだ。”

貨幣経済から、自己生産経済への移行に際して、この国民性が障害となった。

大量生産物への安心感や、ブランドや職人技術への妄信が、自己生産経済の立ち上げを阻害する。

だから今でも、日本を含むこれらの国々は、先進国の中でも自己生産環境の整備が多少遅れている。

パスポートやビザの制度が、これらの国だけに共通して残っている、渡航者の経歴や行動に、まだ国が責任を負うというのだ。

そのための手数を強えられる旅行者にとって、迷惑な話だ。

尤も、手数といっても国から割り振られた数字（マイナンバー）をインターネットを経由して、入国する相手国に登録するだけのことなんだが……。

何はともあれ、三人のマイナンバーと、ビワのペットナンバー、バイカルは旅行中の拾得物だからそのコードを、イギリス当局のサイトにアップロードした。

海に沈んだ夕陽の残光が、フィヨルドの断崖を茜色に染めている。

キャンプファイヤーの火が輝き始めた。

「父さん、ちょっとセンサーが幾つかおかしいんだ――。」

展望室の畳の上でくつろいでいると、ゲームモニターを持った長男がやって来た。

「アラームが出てるのか？」

「――うん。」

「イギリスに着いたら交換するから、リストを出力しておいてくれ。」

イギリスである！待望のイギリスだ！

亭主にとっては、今回の家族旅行の最大の目的地、滞在期間も最長の七日間を確保している。

ハイランドスペイサイドウイスキー・セントアンドリュースオールドコース・ネス湖・コッツウォルズ・リバプール・ウィンブルドン・ダートムーア・ピカデリーサーカス・大英博物館・タイムズスクエア（これは違う）・タワーブリッジ・ビッグベン・バッキンガム宮殿・アビロード……。



我が家は代々シャーロキアンである。

四代前からロンドン・ベーカー街へは常連で、要するにベーカー街を訪れることは、我が家の亭主代々の夢であり義務なのだ！

子供の頃からシャーロック・ホームズの文庫本に埋まって育ってきた。

それなのに、当代亭主だけがまだ訪れたことが無い、嘆かわしいことこの上ない。

――無理もない。

交通機関が無い、ホテルが無い、レストランが無い、土産物もなければ

デパートもスーパーも自販機も無くなった。

15年前の貨幣経済崩壊は、これら無形のサービスに対する報酬決済の手段を全て奪い去った。だからこそ、エアワゴンである！無いものは総て持って行く。

「あなた、スコットランドで何するの？スコッチウイスキーなんて買えないわよ。」

「モルトウイスキー製造のプログラムが、蒸留所のストレージサーバーに埋もれている筈だ、それを掘り起こしてダウンロードしたいんだ。」

猫のビワが苦笑しながら、前を通り過ぎた。

スコットランド北方のジェットランド諸島が見えてきた、あと30分で上陸だ！

長男が慌てて走り込んでくる、「どうした？またセンサーのアラームか。」

「大変だ！入国拒否だって、父さん！」

「入国拒否？何の話だ？」

「イギリスの入国管理局だよ！ネットを使って通達してきた、――身元不明犬のイギリス国内への上陸は認められないんだって！」



何てことだ！こんなことなら、マイナンバーをアップロードなんてするんじゃないかった、イギリスのレガシーだから遵ったんだ、無視して入国すりゃよかった。

「何処の馬の骨か分からん犬は、イギリスに持ち込めねえってか！」

「馬の骨じゃないわよ、犬の子よ！」

ニヤニヤしながら妻が茶化す、段々腹が立ってきた。

「女王陛下が捨て犬拾ってきても入国拒否なのか、この国は！」

「それでも大英帝国か！世界に冠たる犬（ワンワン）王国か！」

「どうせ、入国管理局のポンコツロボットの通り一辺倒の対応だ、無視だ！無視、上陸だあ！」

妻が亭主の肩に手を掛け、哀しそうに見つめる。

「あなたの気持ちは充分わかるわ、でもここはコンプライアンスね……。」

家族の同情の視線を、痛いほど感じた。

「上空通過は拒否されていないんでしょ、スコットランドからロンドンまで、一気に飛んじゃえば！」

嗚呼！ハイランドウイスキーへの夢が、ベーカー街への夢と義務が……。

スコットランド上空を未練たらしく旋回したのが祟って、ロンドン到着は暗くなった、床のハッチを開けて見下ろすと、オレンジ色のロンドンの灯が一面に明滅していた。

ここでもエアークラフは、名残惜しそうに何度も旋回する。

心の片隅で一瞬こう思った、「爆弾落したるか！」

以上全てフィクションです。

下巻につづく。

## 近未来家族旅行（上巻）

<http://p.booklog.jp/book/108358>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108358>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108358>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ